

2月4日付「しんぶん赤旗」から転載しました。

「自分たちのような人をこれ以上出たくない」。千葉県松戸市で1月、新聞販売店の拡張員だった男性3人が日本共産党に入党しました。営業成績に追われ、上司からの暴力や低賃金を経験、いま宣伝など党の活動に燃えています。(男性の名前は仮名) (千葉・浅野宝子)

新聞販売店に就職も低賃金・上司の暴力 共産党に「助けて」

死を覚悟

ともに家庭の事情を抱え、実家との連絡が途絶えている

二人。所持金は合計千円。頼る当てもありません。ネットカフェから電話した東京・日比谷の「年越し派遣村」はすでに閉鎖していました。「死ぬしかないか」。頭をよぎったとき、派遣村事務局の人から日本共産党の松戸・鎌ヶ谷地区委員会の連絡先を教えられました。

電話するとすぐ、三輪由美県議がかつけました。話を聞いた党支部から食べ物や、衣類などが次々寄せられ、宿も決まりました。同じ職場を逃げ出して数日間、駅で寝ていた山本修さん(55)も合流しました。

大学で芸術史を学んだ瘦身(そうしん)に静かな口調の岡野さん。「共産党は悪い印象も聞くけど世の中をよくする印象もあった。実際、こん

拡張員の3人 入党いきいき

過酷勤務

昨年十一月、ある県の新聞販売店に就職した斉藤幸太さん(28)。正社員で基本給プラス一日五千円の募集でした。一日十二、十三時間歩き、六軒を訪問。契約は多い日で三件。実際には三カ月の購読を一件とって千五百円の完全歩合制でした。

一カ月約三十件の契約をとる成績は販売店の中でトップでしたが、「寮の費用が引かれ、とにかく金がない。食べ物も買えない。貯金なんて無理」。電車賃千六百円の距離も歩きました。拡張員の万引



フランスのマスコミから取材を受ける斎藤さんら。1日、東京都渋谷区

きや無賃乗車はザラだといいます。二カ月で体重が十キ落ち、髪の毛がぼさり抜けました。職場では、成績が悪い拡張員が上司から殴るけるの暴力を受けました。それでも所持金が尽きると上司に借りなければなりません。同僚の姿を見て「何度上司を殴ろうと思っただか」と耐えかねた斉藤さんは一月のある朝、営業へ出た後携帯電話の電源を切り、電車に飛び乗りました。さくられないよう、荷物は置いたまま。松戸市まで来て、一緒に逃げた岡野洋介さん(33)と落ち合いました。

「同じように苦しむ人 助けたい」

な親身に助けてくれるとは」。短い茶髪の斉藤さんは「政治のことはまったく知らなかった。共産党ってこんないい党だったんだ。入ってゼロから頑張りたい」。

そろって入党しました。二人はずっと非正規で働いてきました。違法派遣で事業停止命令を受けたフルキャストの仕事などです。「社会に出てからこれしか選択肢がなかった。勝ち組・負け組というけど、努力しても報われない」（岡野さん）のが現状です。

山本さんは大学卒業後、会社の立ち上げ・倒産を経験しました。新聞の拡張でベットボトルに入れた水だけで一日五十キ歩き、足や脊髄（せきずい）を痛

めました。風呂なし三畳の寮で痛み止めを飲んで眠る生活。一月半ば「まったく同じ気持ち」と斉藤、岡野さんに続き入党しました。

仏誌取材

数日後、さつそく駅頭宣伝に参加した岡野さんは「全然抵抗ないです。反共偏見なんてありません。ビラも受け取ってくれるし」と笑顔です。一月三十日、国会で志位和夫委員長代表質問を傍聴した斉藤さんは「おれらみたいな家のない一人ひとりのことを考えてくれる」と感動で鳥肌が立ちました。

職探しの合間にフランスの雑誌から取材を受けました。斉藤さんはカンパされたスーツをキリッと着こなし

「共産党に入ったことを誇りに思います。恥ずかしいことは何もない」と話しました。「これからたかいたかすね」と聞かれ「同じような人を助けたいだけです。派遣切りされた人、我慢して苦しんでいる人がたくさんいる。助けられるのはこの党しかない」と表情を引き締めました。